Osaka University Knowledge Archive

Title	認識・イメージ　日本占領下華北における在留邦人の対中国認識
Author(s)	菊地, 俊介
Citation	OUFCブックレット. 2014, 3, p. 271-293
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27096
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

日本占領下華北における在留邦人の対中国認識

菊地　俊介

抗战时期，华北沦陷区有许多日侨，而且他们与中国人之间有邻居的交流。在华北沦陷区，日侨团体受到日本官方的控制之下以日侨为对象出版许多日文杂志，编辑日侨孩子的作文集等。这些史料所登载的各种文章表现当时的日本人对中国人怀有歧视和优越感，缺乏加害意识。可以说这种对中国的认识是广泛地渗透到当时的日本社会。现在日本人回顾日本人民的战争体验时，大体上描述在战时体制下经验的残酷的压制、严酷的动员、贫困的生活、悲惨的空袭受害等，也就是说一般认为日本人民是战争的牺牲者。另一方面，那段时期日本人民怎样认识侵略对象的中国人和中国社会？现在的日本人的历史认识忽略这方面的问题意识。本文所提出的史料记载是给我们提供重新考虑这种历史认识的材料。此外，通过日侨对中国的认识的实际情况，还可以探讨沦陷区的中国人民怎样认识日本人和日本社会。

１．はじめに

日中戦争期の中国には，日本軍の占領下に置かれ，日本軍が主導して設立したいわゆる傀儡政権によって統治された地域がある。その中で華北に目を向けると，1937 年 12 月 14 日，北京に中華民国臨時政府（以下，臨時政府）が成立し，同政府が日本占領下にあった華北を統治していた。1940 年 3 月，南京に汪兆銘を主席とする中華民国国民政府（以下，汪兆銘政権）が成立すると，臨時政府は形式的には汪兆銘政権に吸収合併され，華北政務委員会と改称するも，実態としては臨時政府の統治機構を継承し，終戦まで占領統治を続けた。

この日本占領下華北では，都市部に多くの日本人が暮らしており，その数

は 40 万人とも言われる。加えて，在留邦人は中国人とも隣近所と言える距離で居住し，日常的に日本人と中国人が顔を合わせる機会が少なからずあったことが，当時の史料から読み取れる［鈴木 1943：5-6，鈴木 1943b：9，鯉沼 1943：18］。在留邦人が中国でどのように暮らし，中国人と関わり，中国に対する認識を形成していったのか。彼らのことを伝える史料として，日中戦争期の日本占領下華北で暮らした在留邦人を対象に出版された日本語の雑誌『燕塵』（1943 年 1 月，『新華北』に改称），『華北評論』，『華北教育』，『建設戦』や，在留邦人の子供の作文を集めた『支那在留日本人小学生綴方現地報告』，『大陸に育つ』，『興亜の子供たち』など，多数の同時代史料が現存している。

これらの史料に描かれた在留邦人像は，享楽主義に陥り，国家意識を欠くというものや，中国人に対しては差別意識や優越感を持っているというものである。このような当時の在留邦人像は，今日の日本における歴史認識に対しても問題を投げかけるものと言えよう。日中戦争期における民衆レベルでの日本人の暮らしを回顧すると，戦時体制下の出征や勤労動員，生活面から思想面に亘る苛酷な抑圧や統制，空襲による被害など，民衆は戦争の犠牲者として認識されるのが一般的であろう。しかし，当時の日本人がそのような状況にありながら，一方で侵略の対象であった中国社会と中国人に対していかなる認識を持ち，いかなる態度で臨んでいたか，特に中国人に対する差別意識や優越感という面は，あまり顧みられることがない。これらの史料の分析は，犠牲者としての一面が強調される当時の日本人民衆に対する今日の理解を見直すことにもつながる。同時に，戦時期の日本人と中国人の相互認識や交流のあり方を振り返ることで，そこから教訓を引き出し，今日を生きる我々が民衆レベルで中国人や中国社会といかに向き合うべきかを考えさせられる素材でもある。

また，日本占領下華北では，臨時政府と「表裏一体」の関係を標榜する中華民国新民会（以下，新民会）が，同政府に協力するための民衆教化動員を進めた。新民会は，現地の中国人民衆に対して「日華親善」，「日華提携」など，民衆の「親日化」を図るイデオロギー宣伝を重点的に行った。その中で，

新民会は日本人像や日本社会像を勤勉，質朴，滅私奉公，忠君愛国などの精神に富むなどと理想化し，「友邦」日本に学べと盛んに宣伝してきた［拙稿 2013：6-7］。しかし，日本占領下華北に多くの在留邦人が暮らし，現地の中国人民衆も実際に彼らと接する機会が日常的にあったことから考えると，実際に接する日本人像や，現地の日本人が中国人に対してどのような態度をとっていたかを明らかにすることは，新民会が行った「親日化」のための教化宣伝の言説が，現地の中国人民衆に対してどれほどの説得力を持ったかを考察することにもつながる。日本占領下華北の在留邦人に焦点を当てることは，こうした傀儡政権史の課題にも応える意義を持っている。

華北における在留邦人に関する研究としては，米衛娜（2012）の研究が最も体系的にまとめている。但し，人口移動の政治的，経済的背景，人口移動が華北社会にもたらした政治的，経済的影響についての叙述や，居留民会や宗教団体などの活動に関する叙述が中心であり，在留邦人の対中国認識など，生活実態や意識に踏み込んで論じているものではない。(1)

移民研究の領域では，在留邦人の経済活動の研究が中心で，中国人との接点についてはあまり解明されていないと指摘されてきた［坂口 2003：362-366］。それでも，在留邦人の帝国意識という観点から，中国人に対する在留邦人の差別意識や優越感は，これまでの移民研究や植民地研究でも論じられてきたことである［坂口 2003：369，木村 1993：52，尹 1989：11-12］。しかし，これらの研究は，在留邦人の生活の実態を同時代史料から明らかにしつつ論じたものではない。いずれの研究でも，上述の在留邦人向けの日本語雑誌は用いられていない。

また，上海の在留邦人についての研究は比較的進んでいるが，その他の地域の在留邦人の研究は遅れていることが指摘されてきた［坂口 2003：362-366］。上述の作文集のうち，特に『支那在留日本人小学生綴方現地報告』を用いて上海における在留邦人の子供の対中国認識を分析した研究は，小島勝（1999）がまず行い，小川直美（2008），徐青（2010）がその後に続く。いずれも，在留邦人が中国人に対して抱く差別意識や優越感について指摘している。但し，小島，小川，徐青の研究は上海に限定して分析したものであり，

その他の地域に暮らした在留邦人の子供については考察対象から除外している。[2] このほか，田中寛（2002）は『満洲国の私たち』という作文集の分析を通して，満洲国の「五族協和」の実態について考察しているが，華北を対象にした研究は依然として空白である。

本稿では，上述の日本占領下華北で在留邦人向けに発行された日本語雑誌と，在留邦人の子供の作文集を分析し，日本占領下華北の在留邦人の生きた姿の復元を試みつつ，彼らの対中国認識について考察する。

２．在留邦人向け日本語雑誌の発行元と寄稿者

まず，日本占領下華北で発行された在留邦人向け雑誌の発行元について確認しておく。本稿では，『燕塵』，『華北評論』，『華北教育』，『建設戦』の 4 点を取り上げる。

『燕塵』の創刊は 1908 年と古い。『燕塵』を発行しているのは燕塵会という在留邦人団体であるが，これは『燕塵』の創刊に際して北京で公使館関係者によって設立された団体である。1913 年に『燕塵』は休刊，燕塵会は解散し，その後，『燕塵』は個人経営や大使館関係者による復刊と休刊を繰り返した。1941 年，元北京新聞社長の風間阜が『燕塵』を復刊し，1942 年に大使館の援助の下に，長崎武を会長として燕塵会も復活した。『燕塵』は，1943 年に『新華北』と改題しており［長崎 1943：105］，[3] 改題した際の巻頭言には，在留邦人の「心の糧」となる雑誌を目指すと書いている［新華北 1943：3］。1943 年 4 月の『新華北』3 巻 4 号によると，燕塵会の名誉顧問には陸軍中将で貴族院議員の坂西利八郎，顧問には在北京日本大使館参事官の土田豊，在北京帝国領事館の北澤直吉，北京居留民団長の西田畊一，天津居留民団長の臼井忠三，東亜新報社長の徳光衣城の名が挙げられており［新華北 1943b：105］，この雑誌が軍や大使館の指導や管理の下で発行されていたことが分かる。

『華北評論』は 1940 年に創刊した雑誌で，発行者である小澤開作は，かつて満洲国で「民族協和」を実現するための思想団体として活動していた満洲

国協和会（1934 年以後，満洲帝国協和会と改称。以下，いずれも協和会）の設立に関わり，協和会を辞した後は華北に移り，新民会に参与した人物である。新民会では総務部長を務めるなど，日本人職員の中では代表的な人物の一人であったが，1939 年の新民会改組に伴い旧協和会系の日本人職員が更迭され，小澤開作も新民会を辞することとなり，その後，『華北評論』を発行した［岡田 1986：332］。

『華北教育』は華北日本教育会が 1940 年に創刊したものである。華北日本教育会は，北京日本大使館の管理の下，在留邦人の教育の資質向上を図るために華北の日本人学校の代表が構成員となって 1940 年に設立した団体である［郭 1993：195］。『華北教育』創刊時の会長は藤井啓之介であるが［藤井 1940：1］，翌 1941 年には在北京日本大使館参事官で，燕塵会の顧問も務めた土田豊が会長に就任している［土田 1941：4］。

『建設戦』は華北善隣会が 1942 年に創刊したものである。同雑誌主催の座談会の中で，「重要産業事業場の従業員の指導誌として，会社側の要望に応えて作って居る雑誌です。主に警防とか善隣とか，剿共と言う様なものを内容にして居ります」と説明している［西ヶ谷，坂本，八木沼 1944：15］。華北善隣会の組織構成については詳細が不明であるが，理事長の三原敏男は陸軍少佐であり［三原 1942：表紙］，在北京日本大使館錬成課長，華北興亜翼賛会本部事務局長を兼務している人物である［三原 1943：14］。

以上のことから見て，『華北評論』はやや異色ではあるが，『燕塵』，『新華北』，『華北教育』，『建設戦』などの在留邦人雑誌は，軍や大使館の管理の下に出版されたものであったことが窺える。

次に，これらの雑誌への寄稿者について見てみると，まず新民会や臨時政府の職員，日本軍の幹部，興亜院の調査官などが挙げられ，政府や国家の立場から発言している記事が掲載されている。次に，日本人居留民団の幹部や大使，領事，日本人学校の校長や教員，国策会社の職員など，現地の日本人社会で一般民衆というよりは比較的代表的な地位にある人物である。更には美術家などの文化人，ジャーナリスト，大学教授，共産主義者，無政府主義者，左翼からの転向者にあたる知識人らの寄稿も多い。このように，寄稿者

の立場は多様であるが，次節で論ずるように，雑誌に寄稿して在留邦人に対して発するメッセージには共通する論調が見られるのが特徴である。また，これらの寄稿は政府や国家の立場から，或いは知識人，文化人などの社会的に名の知られている人物という立場から庶民を啓発するような書き方をしており，庶民が直接声を上げるものでも，庶民の声を代弁するものでもない。ここから読み取れるのは，あくまでもこうした社会的地位の高い人物の視点を通して見える在留邦人像であることを踏まえる必要がある。しかし，掲載されている文章には一部が伏字になっているものもあり，(4) 原文は検閲を受けて削除されるような内容も含んでいたことが窺え，初めから国家，政府の立場を代弁する記事一色というわけではない。

３．在留邦人向け日本語雑誌に描かれる在留邦人像

では，これらの在留邦人雑誌の内容を見ていこう。まず，これらの雑誌に在留邦人の姿がどのように描かれているかを見てみる。

ひとつは，国家意識を欠き，時局に無関心というものである。『燕塵』には，在留邦人の生活には浪費が多いなどと批判し，「働いているのか遊んでいるのか判らないような人間の存在は一日も許されない筈だ」と在留邦人を叱咤する記事がある［燕塵 1942：53］。そして『華北評論』は，華北の「一般利己的商人が私利を追うに汲々たる近状は果して許さるべきであるか」と問い，在留邦人に「自粛自戒」を呼びかけている［華北評論 1940：29］。こうした在留邦人の生活態度に対する批判が，様々な論者から出されている。満鉄に勤めた原口純充［竹中 2012：1175］は「事変は既に第 4 年に入り栄光ある創造は尊い犠牲に依って愈々推進されつつある時，責務の最も重大なる現地北支の同胞は無自覚，無反省なる生活を送っている」，そして「嘗て当局が過去に於て幾度か聖戦の意義を闡明した声明をなしたに拘らず未だに国民が聖戦の真の意義を体得せず，真っ先に体得したる筈の現地邦人が一向其の様子を見せず予期に反して正反対の現象を呈しつつある如き，全く無関心の中に過す邦人の多きことに驚かされるではないか。所謂一旗組と称され

る出稼的イデオロギー所有者，麻雀賭博に現を抜す者誤れる民族的優越感を発揮して顰蹙を買う者，其の他枚挙に遑なき反時局的，反現地的言論をなす者を発見する」［原口 1940：16-17］と述べるなど，在留邦人の生活態度を批判し，そこから時局に対する関心のなさを浮かび上がらせている。いわゆる「一旗組」などの拝金主義が蔓延しており，こうした「不良邦人」が中国に来ていることも国策に反しているという［小山内 1940：17］。また，カフェや高級日本料理店を享楽主義の象徴として非難し［林 1940：19-20，青木 1940：14-15，華北評論 1943：1］，カフェで西洋音楽を流していて，西洋文化を崇拝する日本人を至る所で見かけるといった批判もしている［六波羅 1942：44］。1940 年 5 月には，日本人の中国への渡航制限が実施され始めた。その理由には，日本占領地区の物価の高騰を抑制することが挙げられているものの，「不良邦人」の渡航を防止する意味もあると議論されている［小山内 1940：17］。ここまで見てきたような在留邦人の生活態度は，雑誌上で批判されているだけではなく，日本人の中国への渡航を規制しようとする政策レベルの議論にも発展しているのである。

青年層の享楽主義，個人主義の傾向も批判している。そして日本青年の組織化がうまくできておらず，日本青年は個人のことばかり考えて国家を顧みず，使命感に乏しいという［西ヶ谷，坂本，八木沼 1944：19］。また現地の青年運動の指導者に対しても，青年たちを批判するばかりで青年たちを正しく導くための実践をしていないことも批判する［潮見 1941：12］。カフェや高級日本料理店も日本青年を堕落させるものであることを指摘しながら［林 1940：19-20］，会社の幹部や青年運動の指導者自身も高級日本料理店に通い，自覚を欠いているとも言う［青砥 1943：16-17］。

女性に対しても，職業意識を欠き，女学校でも裁縫や料理が身につかず，特に女子学生はこれらの仕事を使用人に押し付け，自分はスポーツや学問をするだけで，このような「頽廃した婦女風景」を批判している［井上 1942：2］。金と暇だけあって仕事をしない「有閑婦人」の多くは「悪妻愚母」で，仕事をせず，ただ結婚相手を探しているだけの未婚の女性は「国賊」とまで言う［碓井 1944：4］。

なお，こうして在留邦人を批判する一方で，日本「内地」の日本人のことは理想化して描いている。「銃後に於ては子供の駄菓子にすら窮する切りつめた生活をしているに拘らず現地邦人はその銃後国民の覚悟を知らぬ」［木高 1941：14］などと，銃後で協力を惜しまず，勤勉で，倹約をし，自己犠牲の精神で公に奉仕する，国家観念を強く持った日本人像を描いていることは，在留邦人の描き方と対照的である［青砥 1943：17］。

さて，こうした在留邦人批判には，本節で見たような時局認識の欠如や生活態度の堕落のほかに，中国人に対する差別意識や優越感についても中心的に取り上げられている。『華北評論』では，「万一（ざらに？）皇軍将士が多大の労苦の陰に在って支那人をいじめ，取る，不心得者は支那人環視の現場なるが故に斎藤以上の極刑厳罰に値する」［華北評論 1940：29］(5) と，日本軍の宣撫工作を妨げるものという文脈で在留邦人の中国人に対する態度を批判している。では，こうした在留邦人像の検討を踏まえた上で，在留邦人の対中国認識についてどのように叙述されているか，次節で検討していこう。

４．在留邦人と雑誌寄稿者の対中国認識

ここからは，在留邦人の対中国認識に焦点を当てる。大人と子供に分けて論ずることとし，まずは引き続き雑誌を通して，大人の在留邦人について考察する。

在留邦人雑誌には，在留邦人が中国人に対する偏見と差別意識を持っているという記述が多く見られる。在留邦人が中国人に対する民情，風俗，習慣への理解を欠いており，そのような態度が「日中友好」を妨げていると批判している。新民会最高顧問の鈴木美通は，「日華親善」を妨げる日本人側の問題として，「日本人の優越感が華人を蔑視し其反感を買いたること」「中国人の国民性風俗習慣等に対する認識が不十分にして為めに感情を害し親睦を妨ぐる因を作れること」，「眼前の利益に捉われて善隣の考が疎かになりしこと」の 3 点を挙げ，一部の在留邦人のこうした態度が中国人側から見た日本人全体のイメージを損ねていると指摘している［鈴木 1943b：7］。

在留邦人が抱く中国人に対する優越感とは，例えば天津日本中学校教員の河野恒美によると，「日支親善」や「東亜新秩序」などの議論では高邁な意見を述べても実際には中国文化に対して無知な在留邦人が多く，中国人に日本語を教えさえすれば良いといって中国語を学ぼうとしない姿勢に表れているという。そうした在留邦人は「時には『文化程度の低い支那語を学ばしめることは日本人の恥辱であり，又日本の文化を進展せしめる上に何らの効果もない』と放言する」らしい［河野 1942：4］。

このように，雑誌には在留邦人が中国人を見下す姿勢を批判する記事が掲載されているが，こうした雑誌上の記事の執筆者たちの言説自体についても検討しなければならない。なぜなら彼らが書いている在留邦人批判の言説自体にこそ，優越感や差別意識が見られるからである。

戦前，無政府主義運動にも身を投じ，戦時期は天津の『東亜新報』編輯局長であった栗原一男は，「創造さるべき華北文化は日華一体となった興亜理念を基調としたものであるが故に，まず日本的文化は第一の基本銘題として提示されなくてはならぬと考える。これは，われわれ日本人が，3 千年来の皇統をふんで今日大東亜全域における指導的立場において大東亜の守護と創造にあたっている以上，日本人の満々たる闘志と自信において日本文化の創造力はわれわれ日本人の手によって全華北に顕揚されてこなくてはならないのである。（中略）日本文化の顕揚を旗印として全華北に日本的文化を基礎とした華北文化の創建を提唱してゆきたい」と述べている［栗原 1944：116-117］。このほか，美術家の一氏義良は，「華北の各種学校等をますます濃厚に日本化せしむるのみでなく，盛に日本側学校を華北に設立し又盛に日本に留学させる。政治，経済，文化等の他の一体化運動と協力して，日本人的中国人をできるだけ多数に造成する」と，「日本化教育」を提唱している［一氏 1940：26］。

日本はアジアの指導者だと自任し，日本が中国を指導して中国の社会や文化の水準を高める，或いは中国の社会や文化を尊重するのではなく，日本化してしまえば良いという考え方である。このように，日本は中国よりも優れており，日本人が中国人の模範となって指導するという類の言説が，在留邦

人雑誌には随所に見られる。そしてその認識は，中国人に対する日本人の差別意識や優越感を批判する論者にも見られるのである。

元新民会総務科長であった矢部僊吉は，「在支日本人が誤れる優越感を清算し，各民族と平等の立場に於て，生存し，発展向上し，しかも広く東亜諸民族から心から悦服され敬慕されるものでなくてはならない」と述べ，在留邦人が優越感を抱くことに対しては戒めている。それでも，法制史研究者である瀧川政次郎の著書『法律から見た支那国民性』にある「大陸に渡った日本人が支那文化に中毒されず，反対に支那人を日本人の水準にまで引き上げて，之と共に東亜新秩序を建設してゆかしめるにはどうすべきか。第一に日本精神を振興して，日本文化の精髄を各人にしっかりと把握せしめる事である。（中略）日本人が大陸において支那の文化に中毒しないのみならず，その所有せる独自の文化によって，反対に支那人を始め，東亜の諸民族を日本化してゆこうというのには今までのような，日本人にしか解らないような，神秘的日本主義では駄目である。新東亜建設の原理たるべき日本精神は広く東亜の諸民族にも悦服されゐようなものでなくてはならぬ」(6) という一節を引用しながら，「東亜新秩序建設の指導原理である日本精神の振興」を提唱しているのである［矢部 1941：29-30］。

ここで矢部が引用している瀧川の著作では，その前段階として「日本人の支那化」現象について論じている。それは在留邦人が中国文化に心酔し，何でも中国文化を模倣しようとする態度であり，これまで論じてきた対中国蔑視とは異なる当時の在留邦人像も見えてくる。このような現象については瀧川の著作のみならず，『華北評論』にも，志摩淳（職歴不明）が「いわゆる支那通と呼ばれる人達」が「中国及び中国人を讃美するの余り，或は知り過ぎ通じ過ぎたがゆえの盲目であって，日本人を支那化しようとする言行が夫れである。その態度，性向ともにむしろ中国人に近く，事毎に現地の日本人をケナすことを以て能事と心得ている人達である」と書いている［志摩 1940：25-26］。日本精神の発揚などという言説は，こうした「日本人の支那化」現象の反動として表れたものとも考えられよう。

志摩は，「日本人の支那化」現象を批判した後，「之等とは対蹠的に，日清

戦争以来の戦勝気分を持ちつづけ頭から中国及び中国人を軽蔑している者，或は同文同種だとてひとかど心得た積りで甘く見ている者，更に，日本も満洲も支那も見境ない無頓着の大衆がいる」［志摩 1940：26］と，中国人を見下す日本人の態度にも言及し，批判している。しかし，日本と中国の「親善提携」について，「中国人を無力化し或は弱体化して，己独り甘い汁を吸おうなどのケチな根性を日本は持たない筈である。いま日本人が指導者として臨んでいるのは，むしろ彼等を大いに伸ばし発展せしめたい念願の表れに外ならぬのである。この際，中国人だけが伸びて日本人は停滞していていい道理はない。逆に，同一水準になれば忽ち衆寡敵せず日本人の指導権は動揺するものと承知せねばならない」［志摩 1940：27］と述べ，日本人が中国人を指導するものという認識が読み取れる。

同じく『華北評論』に寄稿している，かつて満鉄と関東庁に勤め，少年団や青年団の指導者も務めた鯉沼忍［竹中 2012：532］は，「街頭に洋車夫を擲る」といった行為に見られる，在留邦人の中国人に対する傲慢な態度を批判しつつも，そのようなものは「優越観（ママ）という言葉にも値しない誤れる優越観（ママ）」であるが一部の者の私行に過ぎず，逆に中国人こそ中華思想の伝統に基づく優越感を改めるべきだと論ずる。そして，「正しき意味の日本民族の優秀性を喚起し，日本人たる誇りを自覚せしめ，一方中国に対する彼等の無知と無理解とを是正することでなければならない」［鯉沼 1943：17-21］と，日本人が中国人の誤りを正せるように誇りを持つことを肯定している。

本節冒頭に挙げたように，在留邦人の中国人に対する態度を批判している鈴木美通も，「中国人は旧来の慣習で不潔なことを一向気にしない者が多いのでありますが，あれは人のことだからと言って放置して置いて若し伝染病（ママ），でも発生したならば，忽ち日本人にも迷惑が懸るのでありますから，御互に助け合い戒め合って華人の衛生思想を向上せしむる様に不断から導いて行くようにすることが必要であります。殊に日本人は其の生活に於て中国人より進んで居る所が多いのでありますから個人的であって公徳心に乏しい中国人に対し範を示して行く様にしなければならないと思うのであります」と述べている。日本人が中国人から迷惑を被らないように，日本人が中国人

を指導し育成することが，彼の言う「日華親善」の一面だったのであろう［鈴木 1943：6］。

在留邦人雑誌の記事は，中国人に対する差別意識や優越感を抱く在留邦人の態度を批判する内容を多く含む。だがむしろ，以上のように寄稿者自身の言説にこそ，日本人は中国人よりも優れた民族であり，日本はアジアの盟主であって日本人が中国人を指導するのが当然という認識が読み取れる。しかも，政府側の見解として書かれているものに限らず，様々な立場の寄稿者からもおよそ共通した認識が見出せることも，官民を問わずこれがこの時代における日本人の対中国認識の一面であったことを表していると言える。

同時に，中国人に対する日本人の差別意識や優越感が日中の「親善提携」を妨げるものであるという批判は，国策の要請であったことにも留意すべきであろう。『華北評論』では，支那派遣軍報道部長の馬淵逸雄［福川 2001：687］が日本人の優越感を除去すべきと主張したこと［林 1941：16］，『建設戦』では，北支那方面軍司令官の多田駿が在留邦人に対して「1 人の日本人は 1 人の中国人と心からの良い友人になれ」と言ったことを取り上げ，在留邦人の中国人に対する態度を改めるように説いている［高木 1944：18］。『華北教育』には，南京にいた日本大使の重光葵が「中華民国在留邦人に告ぐ」という告諭を発表し，日本人と中国人の感情の融和，互いに尊敬し，信頼し，愛し合うことを説き，「中国には約 60 万の同胞が在住して居るが，この 60 万人の各個人が日々接触する中国人に対してよく日本精神を発揮し国策線に副った接触をなすならば幾百万，幾千万の中国人をして我が国策を充分に理解せしめることが出来，日華両国の親善と提携とは自ら出来て来るのである」［重光駐華大使 1943：3］と述べたことを掲載している。このように，在留邦人雑誌の寄稿の中には，これら日本軍や大使館の要人の言葉に依拠しながら，日本人は中国人と仲良くなるべきという論説を展開しているものもある。雑誌に寄稿した日本人がただ純粋に日本人の優越感を排すべきことや，中国人に友好的な態度で接するべきことを説いているのではなく，それは「国策」に沿ったものであったことも窺える。

５．在留邦人の子供の対中国認識

ここからは在留邦人の子供の対中国認識について，在留邦人が編集した子供の作文集を通して考察する。

まず，1941 年に出版された『興亜の子供たち』という作文集を見てみる。編者は，綴方教師として著名な高野柔蔵である。高野は冒頭に，「日本の子供は（中略）日本の子供であると同時に，世界新秩序に繋がるところの興亜の大業を成就する東洋の盟主日本たるの自覚を確乎不抜に堅持するところの日本の子供でなければならないのである」と，子供に対する期待を述べる一方で，「如何に小さな子供たちが，興亜の大業を身を以って背負っているか，ここに輯められた児童文を読むと，涙なくしては読み切れない程の真情に動かされるのである。（中略）ここに輯せられた児童文によって，まず大人が反省せられると同時に，次代国民に対する興亜精神培養の資料となり得れば，本書の任は尽きるのである」と，大人に対して反省を促す素材として子供の姿を見せようとする狙いが窺える［高野 1941：3-4］。同書には，華北の在留邦人の子供による作文が 3 編だけ収録されている。うち 1 編「兵隊さんと中国の子供」は，高等小学校 1 年生が，日本兵が中国の物乞いの子供に菓子や衣服を与える光景を書いて日本軍の宣撫工作を称える内容であり［石嵩 1941］，あとの 2 編は尋常小学校 1 年生が書いた「チュウゴクノコドモ」，「チュウゴクノトモダチ」という作文である。この 2 編の作文には，在留邦人の子供が友好的な態度を積極的にとり，中国人の子供と凧揚げなどをして一緒に遊ぶ姿が描かれている。そして編者の高野は，これを日本人の子供と中国人の子供の融和と評している［オオハシ 1941：29，赤川 1941：31］。既に論じたように在留邦人の大人が差別意識や優越感を持ち，大人が中国人と仲良くできていないことに対する批判の意味も込められていよう。

この華北の子供の作文 3 編は，以下で論ずる日本占領下華北の子供の作文集『大陸に育つ』から転載したものである［華北日本教育会 1940b：313 -

314，322，452-453］。『大陸に育つ』の編集方針には，特に子供の姿を通して大人に反省を促すといった意図は書かれていない。収録されている作文も，日本人と中国人の子供同士が友好的に交流する様子ばかりでは決してない。

『大陸に育つ』は，前掲の雑誌『華北教育』と同じく，華北日本教育会が発行したものである。(7) 華北蒙疆の日本人学校 50 余校から千数百篇の寄稿があり，そのうち 250 余篇を選んで収録したものであり，その編集目的は，「事変下に於ける現地生徒児童の作文を蒐集し，これを現在及び将来に於ける現地生徒児童の鑑賞材料たらしめ，一面他地方生徒児童の大陸認識資料たらしむる目的の下に編まれた」と書かれている［編者 1940］。このように，客観的な資料を提供するもののような説明をしている一方，在北京日本帝国大使館参事官で，華北日本教育会副会長の土田豊が記した序文には，「私はわが日本民族の美しさ，正しさ，大らかさ，純潔さ，そして凛然として道義に生きる雄々しさを，本文集に於てほどしみじみと魂に徹して感じたことは嘗て無かった」［土田 1940］とある。同書に収録された作文の内容や，そこから見えてくる在留邦人の子供の姿を肯定，或いは賛美する姿勢は，やはり編集方針に含まれていると見て良かろう。

では『大陸に育つ』に収録された作文の内容から，当時の在留邦人の対中国認識のどのような問題点を見出すことができるか，以下検討していく。

前述の『興亜の子供たち』に転載された 3 編以外にも，在留邦人の子供が中国人に対して素朴な好意や友情を表現している作文はある。例えば，自分と家族が出かける時に隣に住む中国人が留守番をしてくれることや，電車で席を譲る中国人の親切さに好感を持ち，自分も中国人に親切にしたいと思ったと書いている作文がある［金 1940 : 390-391］。しかし，注意すべきは，「いくら中国人だといっても，私達からやさしく親切にしてやれば，中国人からも親切にしてもらえます」［金 1940 : 391］，「中国人の中にも，日本人と同じく，心の正しい者も居る事がわかりました」［小方 1940 : 400］などの表現である。子供が無意識のうちに書いていると思われるこの表現は，基本的には中国人は親切でもなければ心も正しくはないものと見下す意識を持っていることを暗に示している。このような問題を含みつつも，一般の中国人

の中にも良い人はいると書いている作文はあるが，一方で中国人の兵士は完全に憎悪の対象となっている。

中国人兵士に対しては，恐怖，憎悪の念を露骨に表現し，家を焼き，日本人の子供を殺すなどの残虐行為を強調して書いている。高等小学校の女子の作文には，近所の日本人の家が焼かれた跡を見て「此の家を焼いた支那兵が憎らしくなりました」とあり［伊東 1940：36-37］，同じく男子の作文には，自分の家を含めて日本人の家がみな壊されているのを見て，「ひどいことをする支那兵だと腹がたって，しようがありませんでした」とある［南 1940：82］。日本人に対する残虐行為のほか，朝鮮人の子供の作文に，兄との会話で「『君は支那兵をどう思う。日本の兵隊は，負傷や戦死した戦友をそのままに見すてるということはぜったいにしないよ』」と言われ，「僕は支那兵は人情を知らないものだと思いながら兄さんの部屋を出た」と感想を書いているように，中国人兵士に対して文化的な観点から軽蔑する意識も見られる［崔 1940：59］。

これに対し，日本側からの中国側に対する攻撃にあたっては痛快を叫んでいる作文もある。日中戦争が始まった 1937 年 7 月，日本軍は天津の南開大学を爆撃した。このことについて，尋常小学校の男子が，「その一隊は南海（ママ）大学空爆を始めた。爆弾は機翼をはなれて糸をひくように落下する。『はっ。』と思う瞬間，地響とともにはねあがる土煙，土塊，岩，人。痛快だ!! 皆は叫んだ。『やっつけろ。』僕も心の中で叫んだ。爆撃は続けざまに四五回行われた。南海（ママ）大学も南海（ママ）中学も，木っ葉（ママ）みじんにたたきつぶされた。共産党の根拠地は灰と化した。その時の痛快さ。万歳の連呼はやまなかった」と書いている［山城 1940：98］。

一方で，戦乱に巻き込まれた中国人の子供に対する憐みの情も記している。尋常小学校の女子の作文に，ごみをあさる男の子を見て，親はどうしたのかと中国語で尋ねたところ，「よくよくきいて見ると，日本軍が来た時一しょに逃げたのだが，とうとうわからなくなってしまった。生きているのか死んだのか，それもわからないとのことでした。かわいそうになって，私も涙が出そうになりました。此のこじきの事を考えたら，私たち日本のこどもは，

ほんとうに幸福だ。としみじみ有難く思われました」とある［伊 1940：343］。

更に見られるのは，「皇軍」，即ち日本軍に対する感謝である。「皇軍」の「宣撫」のおかげで，また「皇軍」が勇敢に戦って日本人は守られていると称えている。尋常小学校の男子は，「支那人が日本人の子供 2 人を鉄棒で殺しました。其の時の様子，あのむごたらしさは，今でも忘れる事が出来ません。僕等の町は満洲の国境に近い方だから，殆んど支那兵が攻めて来る事はありませんでした。でも 3 千人以上も居る苦力が騒いで日本人に悪口を言ったり，町に出ると皆が変な目をして僕等を見るし，時には四五人で僕等の家を指して何か言いながら恐い顔をしてにらんで行きます。お父さん達は大丈夫だとはおっしゃいますが，それでもやっぱり心配そうな様子です。其の頃は，日本の兵隊さんが早く来てくれる事だけを，毎日毎日祈って居ました」と，ここでも中国人に対する恐怖や憎悪の感情を表現し，その上で 2 年後に「治安」を取り戻した後のことを，「町の中国人の商店さえも見違える程立派になり，中国人達さえも，匪賊等が居なくなったので，とても喜んで居る様です。是も皆日本の兵隊さん達のお蔭です。僕等は心から兵隊さん達に感謝して居ます」と書いている［河邑 1940：121-122］。

中学生の作文ともなると，在留邦人雑誌に見られる大人の言説を模倣したかのような作文も見られる。そのひとつには，「中国人には，3 千年の歴史をもっている国民だけに良いところもある。しかし其の欠点は非常に多い。うそを平気でいう。弱いと思えばつけ上り，強い態度を見せると頭を下げる。それかといって無暗に強い態度をとって，中国人を馬鹿にする邦人も亦多い。此のような態度では到底日華提携，東亜の新秩序をうち立てることは難しい。良く中国人を理解し，その短所を捨てさせ，長所をのばさせ，亦その長所を自分にも取入れるということが，邦人の役目ではあるまいか。そして日華提携，新なる中国を築き，我等の亜細亜は我等の手で，しっかり建設して行かねばならない」とある［江島 1940：496-497］。ここには，中国人の欠点を指摘し，それに対して日本人が優越感を抱くことを戒めつつも，中国人を指導し育成するのが日本人の役目であるかのような，日本人の優越感を批判する自分こそが優越感を持っているという，在留邦人雑誌の言説に見られる特徴

が凝縮されている。

『大陸に育つ』にも，『興亜の子供たち』に転載された作文が示すように，日中の子供が友好的に交流する姿は描かれている。「仲良く遊ぶ日華の子供」という写真が小学生の作文のページに掲載されていることからも［華北日本教育会編 1940b : 318］，『興亜の子供たち』の編集方針のように，日中の子供同士の友好を，在留邦人の子供の「真実」の姿の一つとして捉えていることは窺える。しかし，ここまで見てきたように，『大陸に育つ』の作文に描かれた日本人の子供たちの姿が単純に「日華親善」，或いは日中友好の象徴などと言えないことは，容易に理解できよう。

同じ中国人である兵士への憎悪を徹底的に描いていることは，やはり戦地にあって，戦争をしている相手との「友好」などという言説が，現実味を欠くものであることを示している。また，中国人兵士による殺人，放火などの残虐行為については非難しているが，日本人兵士による加害行為については痛快を叫んでいる叙述はあっても，そのことに対する罪悪感や批判的な視点は全くない。戦乱に巻き込まれた中国人の子供に対する同情を描くにしても，その原因を作ったのが日本軍の侵略であることには触れず，他者を憐れみながら結局自分たちは幸せだと認識するに留まっている。もっとも，日本を美化し，日本側の加害や残虐性について触れないのは，当時の社会状況から見れば当然とも言える。しかしやはり，この作文集は言葉としての「日華親善」はあっても，身近にいる中国人の境遇を自分のことと置き換えて捉える想像力は希薄で，あくまでも在留邦人という自分たちの集団の立場だけからの発言に留まっているものが多数を占めている。

以上のような，憎悪，恐怖，蔑視，そして優越感など，華北の在留邦人の子供が抱く対中国認識は，小島（1999）が『支那在留日本人小学生綴方現地報告』のうち，上海に住む在留邦人の子供の作文だけを分析して得られた結果ともほぼ共通する。なお，『支那在留日本人小学生綴方現地報告』に収録されている，小島が分析対象から除外した華北の子供の作文にも，同様の傾向が見られる。(8) 上海と華北という地域差を問わず，この時代を生きた在留邦人の子供にこうした対中国認識が広く共有されていたと言えよう。更に，

子供の認識は大人の影響を受けて形成されるものであるし，またこれらの作文集を編集したのは大人であり，こうした子供の表現に見える対中国認識に関わる問題について大人が無批判であったこと，或いは肯定していたことも，前述の土田が『大陸に育つ』に寄せた序文から考えられる。子供と大人のそれぞれに見られる対中国認識の問題を切り離して捉えるのではなく，やはりこの時代の日本人社会全体の問題として捉えるべきであろう。

６．むすび

本稿で考察した在留邦人像は，日本占領下華北において刊行された在留邦人向けの日本語雑誌と，在留邦人の子供の作文集を通して見えてきたものである。それらの記事や作文に描かれたものが，そのまま実態を反映しているとは言い切れない。しかし，ここに見える記述が，日中戦争期の日本人民衆について，今日一般的に戦争の犠牲者としての一面が強調して描かれているイメージに対して，他の視点から捉え直させさせる素材であることは確かであり，注目に値する。日本人民衆は，侵略の対象であった中国の人と社会をどのように見ていたのか。これはたとえ当時の日本人民衆を戦争の犠牲者と位置づけるにしても，戦争責任や歴史認識を論ずるにあたっては避けて通ることができない課題である。本稿では，日本占領下華北における在留邦人の，中国人に対する偏見，差別意識，優越感に加え，加害意識の希薄さなどを浮かび上がらせてきた。また，これを在留邦人雑誌の記事の執筆者が同時代の在留邦人の態度をそのように記述しているというだけではなく，そのような在留邦人の態度を戒めて「日華親善」を謳う言説を発表してきた指導的立場にある日本人にもまた，まさに中国に対する優越感と差別意識を持った当事者としての一面が見えることを指摘した。更には，これが在留邦人の子供の対中国認識の形成にも影響を及ぼしていたことも考察した。こうした問題を含んだ対中国認識は，当時の在留邦人，ひいては日本人社会全体を覆っていた空気であったとも言えよう。

戦後様々な曲折を経ながらも，今日の日本では，日本が過去に中国に対す

る侵略と加害を犯したということは国民の間でおよそ共有される認識になった。その上で，東アジアの融和を希求し，「日中友好」を志向することを肯定的に捉える基盤も形成されつつあるものの，一方では今日でも無理解と差別意識を露わにした排外的な中国論が語られ，「嫌中」の空気が国民を覆う現象も見逃すことはできない。本稿で取り上げた日中戦争期の対中国差別意識や優越感は，過去の問題であって今日では解消されたと言えるのか，今日に至るまでの戦後日本社会の対中国認識の変遷も問い直さなくてはならないであろう。

最後に，本稿が日本占領下華北における在留邦人を取り上げたもうひとつの理由は，このことが日本の対華北占領統治において，新民会が現地中国人民衆に対して行った「親日化」工作の実態について検討する素材になるからである。現地の中国人民衆は，日常的に日本人と接していた。新民会が「日華親善」のスローガンとともに理想化された日本人像を宣伝する一方で，現地の中国人民衆は，自分たちを蔑視し，優越感を持つ日本人たちと日々接していたことになる。こうした日本人の態度に触れながら，日本の占領統治を浸透させるために流布された理想の日本人像を描く言説を，中国人民衆はどのように受け止めたのか，或いはそもそも「日華親善」の言説自体が受け入れられるものであったか。在留邦人の対中国認識は，当時の日本占領下華北で占領統治者が唱えた「日華親善」の実態をいかに捉えるかについても問題提起していると言えよう。

注

(1) このほか，北京の在留邦人の人口移動を研究したものに孫冬虎，王均（2001）がある。

(2) なお，小島は『支那在留日本人小学生綴方現地報告』を分析対象としながらも，入手した作文集として，この他に『日本民族小学生作品集』と『大陸に育つ』を挙げている。前者は，海外へ移民する日本人の教育に携わった団体である日本力行会が，在外邦人の子供の絵画，書道，作文などを集めて開いた展覧会の作品をまとめたものであるが，中国の在留邦人の子供による作文は少ない。後者については，上海の日本人小学校が公刊したものであり，ここからは 1 校の子供のことしか明らかにでき

ず，上海全体を捉えるには不十分であると小島は説明し，考察対象から除外している。本稿で取り上げる『大陸に育つ』は，1940 年 2 月に成立した華北日本教育会が公刊したものであり，小島が言及している『大陸に育つ』とは別のものである。なお，小川，徐青も，『大陸に育つ』については小島と同じ説明をしている。

(3) なお，郭衛東主編（1993），p.416 や近代中国研究センター編（1964），p.4 は，『燕塵』は 1918 年に終刊したとまでしか説明しておらず，本稿が取り上げる日中戦争期に復刊した『燕塵』及び『新華北』については全く触れていない。

(4) 例えば林君彦（1941b），p .8，西ヶ谷徹，坂本龍起，八木沼丈夫（1944），p.19 など。

(5) ここに出てくる「斎藤」とは，代議士の斎藤隆夫のこと。

(6) 原文は瀧川政次郎（1941）『法律から見た支那国民性』，大同印刷館，pp.224-225。

(7) 注(2)に既述の通り，本稿が取り上げる『大陸に育つ』は，小島らが言及している上海の日本人学校が発行したものとは別のものである。

(8) 例えば青島の小学生黒田富士夫「日本に生れた有難さ」や上村美智代「内地の友へ」は，物乞いや，ごみをあさったり不衛生な衣服を着たりしている中国人を見て「支那人に生れなくてよかったなあ」，「日本に生れた嬉しさが，しみじみと感ぜられます」と，憐れみに加え，日本人は中国人と違って幸福だという感情を書いている（pp.77-78，pp.155-156）。済南の小学生吉富信男「支那にきてから」は自分に銃を向ける中国兵に対する恐怖や，壊された家を見て中国兵への憎悪の念を抱いたことを書いている（pp.116-117）。

参考文献

＜日本語同時代史料＞
燕塵社（1941，1～1942，10）『燕塵』（1-1～2-10）
燕塵社（1943，1～1944，6）『新華北』（3-1～4-6）
華北善隣会（1942，8～1945，3）『建設戦』（1～31）
華北日本教育会（1940，8～1944，6）『華北教育』（1-1～5-3）
華北日本教育会（1940b）『大陸に育つ』，新民印書館
華北評論社（1940，3～1944，6）『華北評論』（1-1～5-6）
高野柔蔵編（1941）『興亜の子供たち』，ふたら書房
新居格編（1939）『支那在留日本人小学生綴方現地報告』

日本力行会編（1940）『日本民族小学生作品集』，日本力行会
瀧川政次郎（1941）『法律から見た支那国民性』，大同印刷館
満洲国協和青少年団中央統監部編（1942）『満洲国の私たち』，中央公論社
三原敏男（1942）『名将の謀略』，軍事学指針社

「華北春秋」（1940）『華北評論』1-2，，3 月 15 日
「北京春秋」（1942）『燕塵』2-10，10 月
「新年に躍進す」（1943）『新華北』3-1，1 月
「燕塵会顧問」（1943b）『新華北』3-4，4 月
「高級料亭を全廃せよ」（1943）『華北評論』4-8，8 月
青木太郎（1940）「現地享楽面の粛正」『華北評論』1-15，10 月 15 日
青砥継男（1943）「青年と錬成」『華北評論』4-7，7 月
赤川志朗（1941）「チュウゴクノトモダチ」，高野柔蔵編『興亜の子供たち』，ふたら書房
伊英子（1940）「かわいそうなこじき」，華北日本教育会編『大陸に育つ』，新民印書館
石嵩幸子（1941）「兵隊さんと中国の子供」，高野柔蔵編『興亜の子供たち』，ふたら書房
一氏義良（1940）「華北文化工作の重点」『華北評論』1-6，5 月 15 日
伊東英子（1940）「やかれた家」，華北日本教育会編『大陸に育つ』，新民印書館
井上吉久（1942）「女子教育の新体制」『華北教育』3-8，8 月
碓井數明（1944）「女子の職業指導」『華北教育』5-3，6 月
江島晴夫（1940）「我等が青島」，華北日本教育会編『大陸に育つ』，新民印書館
小方智砂子(1940)「大陸にての感想」，華北日本教育会編『大陸に育つ』，新民印書館
オオハシテルヨ（1941）「チュウゴクノコドモ」，高野柔蔵編『興亜の子供たち』，ふたら書房
小山内匠（1940）「邦人渡支制限の逆効果」『華北評論』1-7，6 月 1 日
河邑泰雄（1940）「思い出」，華北日本教育会編『大陸に育つ』，新民印書館
木高孝蔵（1941）「時局認識の欠如」『華北評論』2-10，8 月
金昌洙（1940）「北京の中国人」，華北日本教育会編『大陸に育つ』，新民印書館
栗原一男（1944）「華北新文化の進路」『新華北』4-1，1 月
高野柔蔵（1941）「はしがき」，高野柔蔵編『興亜の子供たち』，ふたら書房

鯉沼忍（1943）「所謂優越感に就て」『華北評論』4-12，12 月
河野恒美（1942）「華北の支那語教育」『華北教育』3-5，5 月
崔応商（1940）「討伐」，華北日本教育会編『大陸に育つ』，新民印書館
重光駐華大使（1943）「中国在留邦人に告ぐ」『華北教育』4-1，1 月
志摩淳（1940）「『所謂親善』と『無頓着』の横行」『華北評論』1-10，7 月 15 日
鈴木美通（1943）「新国民運動の拡大実践に就て」『華北評論』4-9，9 月
鈴木美通（1943b）「日華の善隣友好に就て」『新建設』16，12 月
潮見畧（1941）「苦悶する現地青年運動」『華北評論』2-5，3 月
高木健夫（1944）「善隣序説」『建設戦』17，1 月
土田豊（1940）「若き魂に祈る」，華北日本教育会編『大陸に育つ』，新民印書館
土田豊（1941）「会長に就任して」『華北教育』1-2，1 月
長崎武（1943）「燕塵会趣意書」『新華北』3-4，4 月
西ヶ谷徹，坂本龍起，八木沼丈夫（1944）「現地の青少年を如何に指導すべきか」『建設戦』26，10 月 1 日
林君彦（1940）「とも食いの新体制」『華北評論』1-14，9 月 15 日
林君彦（1941）「現地日本人の猛省を促す」『華北評論』2-6，4 月
林君彦（1941 b）「治強運動の根本問題」『華北評論』2-11，9 月
原口純充（1940）「在支青年組織化の必要性」『華北評論』1-4，4 月 15 日
藤井啓之介（1940）「『会誌』発刊に際して」『華北教育』創刊号，8 月
編者（1940）「文集の編纂について」，華北日本教育会編『大陸に育つ』，新民印書館
南嘉講（1940）「避難の思い出」，華北日本教育会編『大陸に育つ』，新民印書館
三原敏男（1943）「対華新方針と善隣工作」『建設戦』14，10 月
矢部僊吉（1941）「在支邦人子弟の教育問題」『華北評論』2-13，11 月
山城典彦（1940）「空爆」，華北日本教育会編『大陸に育つ』，新民印書館
六波羅正隆（1942）「日本的な音楽への要望」『華北評論』3-8，8 月

＜日本語論文・研究書＞
岡田春生編（1986）『新民会外史』（前編）函館：五稜出版社
木村健二（1993）「在外居留民の社会活動」，大江志乃夫ほか編『岩波講座近代日本と植民地』（5）東京：岩波書店 pp.27-56
小川直美（2008）「大陸の幻想―『支那在留日本人小学生綴方現地報告』か

ら―」『大阪経大論集』（58）3 月 pp.37‐45
小島勝（1999）「上海の日本人学校の性格」，小島勝，馬洪林編著『上海の日本人社会』京都：永田文昌堂 pp.135‐197
坂口満宏（2003）「在外居留地・居留民研究の現在」，京都女子大学東洋史研究室編『東アジア海洋域圏の史的研究』京都：京都女子大学 pp.351-373
徐青（2010）「戦前におけるシャンハイ・イメージの一断面」『名古屋大学中国語学文学論集』（22）12 月 pp.19‐38
田中寛（2002）「『満洲国の私たち』に描かれた真実」『大東文化大学紀要』人文科学（40）3 月 pp.121-145
尹健次（1989）「植民地日本人の精神構造」『思想』（778），4 月 pp.4-28
拙稿（2010）「日本占領下華北における新民会の青年政策」『現代中国研究』（26），3 月 pp.41-61
拙稿（2013）「日本占領下華北における新民会の女性政策」『現代中国研究』（32），3 月 pp.1-18

＜日本語事典・目録＞
近代中国研究センター編（1964）『中国関係日本文雑誌論説記事目録』1，東京：近代中国文化センター
近代日本社会運動史人物大事典編集委員会編（1997）『近代日本社会運動史人物大事典編集委員会』東京：日刊アソシエーツ
竹中憲一編著（2012）『人名事典　「満州」に渡った一万人』東京：皓星社
日本アナキズム運動人名事典編集委員会編（2004）『日本アナキズム運動人名事典』東京：ぱる出版
福川秀樹（2001）『日本陸軍将官辞典』東京：芙蓉書房出版

＜中国語論文・研究書＞
徐青（2012）『近代日本人対上海的認識』上海：上海人民出版社
孫冬虎，王均（2001，3）「1928-1948 年北平日僑的数量及其作用」『北京聯合大学学報』（15-1）3 月 pp.100-104
米衛娜（2012）『近代華北日僑問題研究』北京：人民出版社

＜中国語事典＞
郭衛東主編（1993）『近代外国在華文化機構総録』上海：上海人民出版社